

# イザベラ・バード 山形の足跡

## 元教諭 ルート調査し出版

山形市東原町の元小学校教諭渋谷光夫さん(63)が、英国の旅行作家イザベラ・バード(1831~1904)が「日本奥地紀行」で1878年に県内を旅したルートを調査し、「イザベラ・バードの山形路」(無明舎出版)としてまとめた。当時の地図や絵画、石版画などを現在の写真と並べ、街道の歴史と今も息づく地域の魅力を紹介した。



「イザベラ・バードの山形路」を手にする渋谷さん

渋谷さんが「日本奥地紀行」に出会ったのは約35年前。小学校教諭になりたての頃で、山形大の恩師から薦められた。「明治の山形の情景が目に見えるようだ」。バードの観察力と巧みな表現、そして地域の習俗を理解しようと務める「国際人」としてのまなざしに興味を覚えた。

以来、「いつか研究したい」と思ったが、仕事が忙しく実現できなかった。そんな渋谷さんに転機が訪れたのは、定年退職した翌年の2009年、全国各地で街おこしなどを手がけるNPO法人「元氣・まちネット」(東京都)が企画した「イザベラ・バード文学散歩の旅」への参加からだ。バードが新潟県から県内入りした小国町から、秋田県に抜けた金山町までをバスで移動し、峠を散策した。バードが実際に歩いた橋が当時の状態で残っていることに感激。「バードが歩き観察した文化遺産が県内にもまだ残されているのでは」と思い、忘れかけていた研究心が沸き起こった。

その後約2年間、再就職した仕事の合間に県内ルートを何度も訪れ、そこに暮らす人々取材した。そこでは、バードが通った峠を整備し、守る地域の人たちや、当時振る舞った地元料理を作り続ける夫婦らがい

た。

渋谷さんは「当時の街道を再び歩くと、バードが感じた山形の人の優しさや、おもてなしの心が今も残っている」と強く感じた。そうした山形の良さを、現在の我々が大事にしていかなければ」と話す。

A5判215ページで1890円(税込み)。